

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 16 日現在

機関番号：18001

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25381135

研究課題名(和文) 沖縄の離島と本島間の学力格差に関する調査研究

研究課題名(英文) Surveillance Study about the Academic Achievement Gap of the Children between the Isolated Island and Main Island of Okinawa

研究代表者

西本 裕輝(Hiroki, Nishimoto)

琉球大学・大学教育センター・准教授

研究者番号：20301393

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、沖縄の本島と離島間に存在する学力差を埋めるためのヒントを得ることである。沖縄の高校生を対象とした質問紙調査を通して、いくつかのことが明らかになった。

まず本島と離島では、父親の大卒率に大きな差異があった。本島では50.4%であったのに対し、離島では13.1%と大きな差異があった。このことにより、離島の生徒は大学に進学するという意識を持ちにくく、ロールモデルを持つことが難しいと考えられる。離島の生徒は、そもそも大学進学という選択肢を持つことも難しく、学習意欲や進学意識を維持しにくい。こうしたことが本島と孤立した島間に学力差を生じさせる原因となっていると考えられる。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to obtain the hint for burying the academic achievement difference which exists between main island of Okinawa, and the isolated island by investigating to a high school student.

By conducting questionnaire survey to the high school student of Okinawa, I found the following. In the first place, the big difference to fathers' college graduation rate was between main island and the isolated island. Although fathers' university unemployment rate was 50.4% in main island, it was 13.1% on the isolated island. I can say that this difference is a very big difference. By this, the student of the isolated island cannot have the volition of going on to a university, and cannot have a role model. This is the cause of producing an academic achievement difference between main island and the isolated island.

研究分野：教育社会学

キーワード：学力 離島 高校生 モデルの存在

1. 研究開始当初の背景

2007年10月24日、沖縄の教育界に衝撃が走った。2007年4月に文部科学省が実施した「全国学力・学習状況調査」(以下、「全国学力調査」)の結果が公表されたのである。その結果、沖縄の児童・生徒の正答率はどの学年でもどの教科でもすべて全国最下位であった。そしてその状況は、申請当初も変わらず、「全国学力調査」(2012)においても、全10科目で全国最下位となっていた。沖縄は復帰以来、学力がもっとも低い地域とされてきたが、あらためてそれが確認される形となった。

2. 研究の目的

以上の背景をふまえ、本研究の目的は、全国最下位の沖縄の子どもたち、特に離島の子どもたちの学力をどのように向上させたらよいのかについて、沖縄本島と離島における高校生を対象とした学力調査(学力テスト+質問紙調査)結果の比較を通して、県外との格差、本島-離島間の格差を縮小するための方策を検討することである。

ここでは、沖縄県内外の学力格差については当然のこととして、沖縄本島-離島間の学力格差に特に注目する。というのは、これまでの応募者の研究から、本島と離島の間にはかなりの学力格差が存在することが明らかになったからである。「全国学力調査」の正答率において離島地域の小中学生の学力は、本島平均よりもさらに5ポイントほど低くなっている。沖縄県平均と全国平均との差がやはり5ポイント程度であることから考えると、全国平均との差は10ポイントあることになり、この差はかなりの差であると考えられることができる。

また、本島と離島の高校の大学進学率を比較すると、沖縄本島内の県立進学校が軒並み80%を超える中、離島の県立進学校、八重山高校(石垣島)、宮古高校(宮古島)の平成23年度の大学進学率はそれぞれ、70.4%、52.0%と大きく下回っている。

なお、ここで言う離島とは、石垣島、宮古島、久米島等、沖縄本島から離れたところに位置する県内の島々の中で、本島から飛行機や船でしか行き来できない島のことである(橋を使って行き来できる島は除く)。

これまでの研究代表者の研究から、沖縄の子どもたちの学力が低い要因は、いわゆる「早寝・早起き・朝ごはん」に象徴されるような基本的な生活習慣が確立されていないことであると考えられる。例えば、文科省による「全国学力調査」(2010)によると、沖縄の小学6年生の朝食摂取率は85.2%で、研究代表者が独自に順位をつけて集計したところ、学力と同様に全国最下位となっている。他にも、「早寝」に関連して、同様に全国学力調査(2010)から「夜10時までの就寝率」を算出したところ、34.4%で47都道府県中46位、「早起き」に関連して、「毎日、同じくら

いの時間に起きている」のしている率は32.7%で最下位となっている。高校生においても、研究代表者の2012年の調査から、沖縄の県立進学校の高校生の朝食摂取率が80.1%なのに対し、県外の県立進学校の高校生は89.6%であり、約10%の差が生じている。

つまり、全国学力調査で見ても、研究代表者による高校生調査においても、沖縄の子どもたちの生活習慣は乱れていると言えるのである。離島の子どもたちの学力はさらに低いので、基本的な生活習慣もさらに乱れていると推察される。よって、生活習慣の改善を通して離島の学力を向上させることができると考えられ、ひいては沖縄県全体の学力を向上させることができると考えられる。

なお、ここでは主に高校生を研究対象とする。ここで高校生に注目する理由は、小中学生については文科省の調査結果の分析が進めば、ある程度課題が明らかになり、対応策も検討できるのに対し、高校生については大学進学等に直結しているにも関わらず、基礎データが不足しているからである。

3. 研究の方法

研究は3年計画で進める。具体的には、離島と本島の進学校の高校1年生が3年生になるまで、学力テストと質問紙調査を併用した調査を実施することによって追跡し、(1)離島と本島間の学力格差の確認、(2)それを縮小させる方策、(3)沖縄県全体の学力を向上させる方策などについて検討する。

4. 研究成果

沖縄本島に位置する進学校(県立普通科)2校と離島に位置する進学校(県立普通科)2校を3年間、追跡調査を行った結果、さまざまなことが明らかになった。

質問紙調査と学力テストにより3年間追跡できた人数は、本島内の進学校2校372名、離島に位置する進学校2校389名、計761名であった。調査項目は学力(学力テストの得点、学校の成績等)、親学歴、希望進路、親の進学期待、家庭学習時間等、多岐にわたる。

データ分析の結果、離島-本島間のさまざまな違いが明らかになった。例えば、父親の大卒率であるが、本島の進学校で50.4%と比較的高かったのに対し、離島の進学校では13.1%と非常に低かった(図1)。

また親の進学期待も本島では大学進学(大学院進学も含む)を期待する率が74.1%であったのに対し、離島では20.2%と大きな差が見られた(図2)。そうした環境の違い、特にロールモデルの存在が乏しいことが離島の生徒の学力を押し下げている要因の一つと考えることができる。

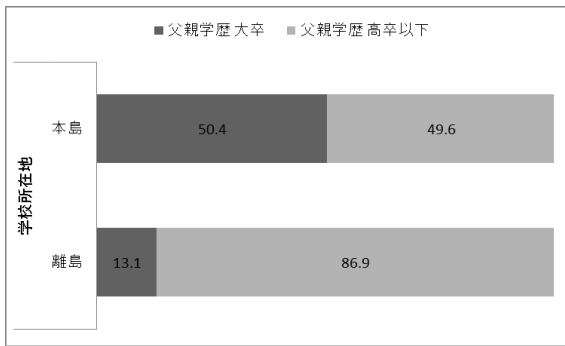


図1) 父親の大卒率の比較

(カイ2乗検定の結果1%水準で有意)

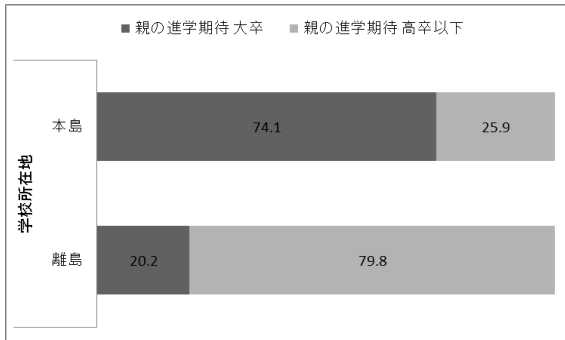


図2) 親の進学期待の比較

(カイ2乗検定の結果1%水準で有意)

ただし離島の生徒の中にも、3年間を通して、高い学力を維持したり大きく伸びたりする者がいる。そうした生徒に注目することによって、離島の学力向上のヒントを得ることができると考え、わずかながら存在するそうした生徒の特徴を概観した。

そうしたところ、いくつかの特徴が明らかになった。例えば、離島の生徒で高い学力を3年間維持(5段階評定の成績が平均4.5以上)している者は、親戚に大卒者がいる率がそうでない者に比べ高かったのである。つまり家族に大卒者がいなかったとしても、親戚に大卒者がいれば、その人をロールモデルとして将来設計を考えることができていることを示唆する結果である。離島における親戚の結びつきの強さを反映した現象と言える(図3)。

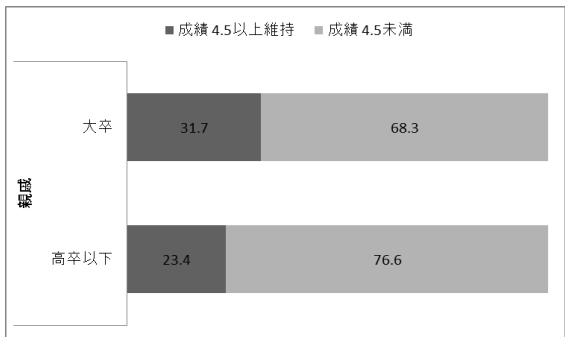


図3) 親戚の学歴の比較

(カイ2乗検定の結果1%水準で有意)

こうした結果から、離島の学力向上のヒントが得られた。すなわち、離島の高校生は、ロールモデルの存在さえあれば、進学意欲を高めたり高い学習意欲を維持したりすることができる可能性がある。そもそも大学進学が選択肢にすらない生徒たちも多い離島地域では、大卒者と触れ合う機会を多く持ち、少なくとも大学進学が選択肢の一つとなるよう意識づけることも重要であろう。

よって意図的にそうした機会を作る、例えば、現役大学生や大卒者と触れ合う機会を多く設定することも一つの方策ではないだろうか。

こうした取組を続けていくことにより、学力格差も徐々に縮小していくことであろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

西本裕輝 2016, 「沖縄の高校生の学力問題解決のための一手法」『琉球大学教育学部紀要』第71集(近刊)査読あり。

〔学会発表〕(計1件)

西本裕輝 2015, 「沖縄の現状～学力向上の鍵となる制度～」日本子ども社会学会第22回大会(於:愛知教育大学)愛知県。

〔図書〕(計2件)

西本裕輝 2015, 「学力の社会学」南本長穂編著『入門・子ども社会学』ミネルヴァ書房、全216頁。

西本裕輝 2015, 「沖縄の学力問題」『沖縄で教師をめざす人のために』協同出版、全304頁。

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計0件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

取得年月日:

国内外の別:

〔その他〕

ホームページ等

6 . 研究組織

(1)研究代表者

西本裕輝 (NISHIMOTO HIROKI)

琉球大学・大学教育センター・准教授

研究者番号：20301393